

第23回シン・ケアラボ@きたかみグループワークまとめ ～ 概要版 ～

職種別参加申込者

職種（分野）等		申込数	当日参加者
医師		1	0
看護師・助産師		6	5
薬剤師		5	4
医療ソーシャルワーカー		1	1
介護支援専門員		11	5
介護施設職員・相談員		9	6
援 地 域 シ ン 包 括 支 援	保健師	3	2
	社会福祉士	3	3
	介護支援専門員	6	3
	生活支援コーディネーター	2	2
理学療法士		3	3
作業療法士		2	2
障がい福祉施設職員		7	5
福祉用具販売等職員		2	2
コミュニティ・ソーシャルワーカー（社協）		1	1
行 政 職	保健師（市長寿介護課）	1	1
	社会福祉士（市子育て世代包括支援センター）	1	0
	事務職（市長寿介護課）	1	1
合計		65	46

スタッフ名簿

進行役（MC）
主任介護支援専門員 老林 聖幸
コーディネーター
医療ソーシャルワーカー 櫻井 茂
アシスタント
看護師 佐藤 晃
医療ソーシャルワーカー 菊池 涼子
社会福祉士 石川 晴基
保健師 住吉 香奈子

※グループワークにスタッフ（看護師）1名を増員して、47名で実施した。

グループA（4人）

- ◆メンバーの職種等：薬剤師、介護施設職員、理学療法士、包括職員（社会福祉士）
- ◆まとめ（発表者：薬剤師）

10年前までは施設内で、決められた場所でしか仕事をしていなかったが、地域にできる仕事が多くなった。決められたことを決められた通りにやっていたことが多かったが、今は利用者の意思、人権、希望ができるだけ叶うようにカスタマイズすることが多くなった。また、自分たちの仕事としてできること、利用者の希望とを話し合っ決めていくことが多くなった。

おいばセブン・キーワード→利用者個性、柔軟性、合意形成

グループB（4人）

- ◆メンバーの職種等：看護師、特養施設長、包括職員（保健師）、福祉用具職員
- ◆まとめ（発表者：福祉用具職員）

福祉用具の話になるが少し業界が閉鎖的に感じることが多い。同業者間の連携が不足していると感じる。ケアラボのような場に参加することは貴重と感じている。10年前と比べてベッドをはじめ様々な福祉用具が高機能化されているので利用者にとっては良いことだが、その分福祉用具専門相談員はより知識を深めなければならない。人材不足という課題もある。また、以前は入院されると自宅に戻る機会が少なかったと思うが、今は、退院後、自宅に戻るという場合、入院前と後の福祉用具も変わってくるので、知識を深めサポートしていく必要があると感じている。

グループC（5人）

◆メンバーの職種等：看護師、介護支援専門員2、包括職員（保健師）、障害福祉施設管理者

◆まとめ（発表者：障害福祉施設管理者）

利用者本位というキーワードで話が進んだ。もちろん、利用者ばかりでなく家族の協力も必要だが、家族辞退のかたちの変化、介護力の低下などの背景があり、支援者側でどのようにつながりを持っていけばよいかそこが課題。つながりをいかに持っていかか私たちが仕事であり、ひとりひとりがつながっていくことが大切。

グループD（5人）

◆メンバーの職種等：薬剤師、介護支援専門員、包括職員（介護支援専門員）、通所リハ相談員
相談支援専門員（障害福祉）

◆まとめ（発表者：包括職員（介護支援専門員））

薬剤師さんが小学校に出向き危険ドラッグの話をしてくる、その他、環境調整の仕事やスポーツファーマストなどもしていると知りことができた。また、最近の状況として、利用料を年金支給月にしか支払えないケースや、利用者から活動の充実性を求められる、障がいを持つ方同士で結婚するケースなども増えている。驚いた。

グループE（4人）

◆メンバーの職種等：助産師、介護施設職員、医療ソーシャルワーカー、就労支援員（障害福祉）

◆まとめ（発表者：助産師）

SNSなどの普及により、看護や介護などの技術習得がしやすくなった。SNSなどで他のお母さんと比べて自己肯定感が下がっている方が多く難しいなと感じる。子育てをするのが難しい時代だなと感じる。10年前は産後ケア事業は難しいよと言われていたが、その後法律が変わり各市町村で事業を実施するようになり、一般の人たちにも知ってもらえるようになった。

おいぼセブン・キーワード→SNS時代になって人との付き合い方なども大きく変化

グループF（4人）

◆メンバーの職種等：薬剤師、介護支援専門員、サービス管理責任者（障害福祉）、作業療法士

◆まとめ（発表者：薬剤師）

薬剤師、以前は薬を処方すれば良かったが現在は訪問薬剤指導なども行っている。薬を減らす努力や後発品の説明などを行うことがいろいろと増えてきた。理学療法士、以前であればケアマネジャーがサービス担当者会議を開催していたが、それ以外にリハビリ会議の定期開催や外の会議が増えてきた。地域とのつながりが増えてきた。加算などの書類が増えた。サービス管理で言えば障がい者の種類が変化してきた。コロナの影響もあると考えるが対面での対応が少なくなり書類での対応が非常に増えてきた。研修などが少なくなってきた。

グループG（5人）

◆メンバーの職種等：看護師、介護支援専門員、老健相談員、包括職員（生活支援コーディネーター）
多機能型事業所管理者（障害福祉）

◆まとめ（発表者：看護師）

10年前と比べて良くなったこととして、訪問看護の知名度があがったこと、障がい分野として個性を尊重されるようになった、介護分野では選択できる幅が増えた。悪い面としては、自殺などの相談が増えてき

ていること、コロナの影響もあると思うが家庭内別居や同居していても関係ないという人が増えてきた、それもあって保証人や身寄りが無いという人が増えているのではないかと思う。

グループH（4人）

◆メンバーの職種等：看護師、介護支援専門員、包括職員（社会福祉士）、理学療法士

◆まとめ（発表者：包括職員（社会福祉士））

10年前と変わったこととして、それぞれの分野で一人一人に合わせて支援をしているというのが変わってきたところと考える。やる気が下がっている人への伴走支援を行ったり、介護サービスなど多くの選択肢がある中で、選んでいけるように支援を行うなどしている。家族も仕事など両立しながら介護できるようになってきたが、その方に寄り添って支援をしていかなければならない世の中になった。

グループI（4人）

◆メンバーの職種等：看護師、包括職員（生活支援コーディネーター）、福祉用具職員、行政職員（事務職）

◆まとめ（発表者：福祉用具職員）

10年前と比べて、情報社会の影響で利用者や家族がいろいろと調べることが可能なので、いろいろと指摘を受けることが多くなった。仕事内容が多様化してきている。例えば、地域の方々に対する意識改革などの仕事も求められているのではという話がでた。虐待や認知症の相談、さらに遠方にいる家族からの相談も増え、対応の難しさを感じている。プライベートで地域の活動に取り組む若い人も増えているという話がでた。

グループJ（4人）

◆メンバーの職種等：介護支援専門員、包括職員（社会福祉士）、理学療法士、行政職員（保健師）

◆まとめ（発表者：理学療法士）

グループメンバー全員、ジェネラリストではなくスペシャリストであると感じた。10年前と変化してしていることとしては、提供するサービスが充実してきている、細分化してきている。それに伴ってコーディネートする側が常にアップデートしていかなければならない。また、扱う問題が複雑になってきている。また、リハ職は10年目と比べてだいぶ地域にでるようになってきたがもっともっと地域へでいく必要があると感じた。包括などは、警察や病院などみんなと事例にあたっていくことが増えた。こういったものが重層的支援体制整備事業につながっていくのではないかと考える。

グループK（4人）

◆メンバーの職種等：薬剤師、包括職員（介護支援専門員）、作業療法士、社協CSW

◆まとめ（発表者：社協CSW）

社協って何だろうと、もっと社協について知ってもらい必要があると感じた。10年前と比べて家族関係や地域の情勢など求められているものが、どんどんどんどん広くなったり深くなって、皆さんそれぞれ特に地域に向くことが多くなったり、職種間で話をするが多くなった。今後もこの動きを広めていくことが、制度の動きにつながってくるのかなと思います。

おいばセブン・キーワード→サービスが細分化し増える選択肢、対象者がその選択肢を知らなければどうにもならない。選択肢をしっかりと伝えられるようにならなければならない。自分のフィールドだけではない、ある程度知っていてつながりをもっておく必要がある。選択肢を提供しても選択できない人が増えている。選択できるように支援する、伴走することがとても大切。自分が説明できなくても説明できる仲間を頼ればよい。